花は仏、無言の説法

大いなる道

京都市山科区に真言宗山階派の大本山・勧修寺がある。千年以上続く歴史に加え、代々法親王が住んだ門跡寺院という格式も備える。在任半世紀を過ぎた筑波常遍門跡(83)を訪ね、境内の花が示す仏の教えや、寺と明治維新の関わりなどを聞いた。（浅井佳穂）

勧修寺・筑波常遍門跡

「花は和みや安らぎを与えてくれる」と語る勧修寺の筑波門跡（京都市山科区・勧修寺）＝撮影・辰己直史

勧修寺は900（昌泰3）年、醍醐天皇が母の追善のために建てた寺だ。約2㌶ある庭園は平安時代の創建時の面影を残すとされ、かつて宮中に氷を献上した池もあり庭園は「氷室園」や「氷池園」などとも呼ばれる。初夏の庭にはスイレンが咲き拝観者の目を和ませる。「寺はそれぞれシンボルの花を持っている。この近くだと醍醐寺は太閤豊臣秀吉もめでた桜、隨心院は平安の美人・小野小町ゆかりの紅梅だ。勧修寺は代々法親王が世間を離れて修行に励んだ場所。午前中にひっそりと咲くスイレンが寺のイメージに合う」

スイレン以外にも春には桜、秋にはカエデといった四季それぞれの植物が庭園を彩る。「花を見てかんしゃくを起こす人はいない。花は和みや安らぎを与えてくれる。花は無言の説法をしているわけで、それぞれが仏でもある」

京都では近年、堂内だけでなく庭園なども撮影不可とする寺院が増えている。しかし勧修寺では境内を撮影可能としている。「自然なままを楽しんでもらいたいという思いから撮影できるようにしている。美しいと思うからこそ人は写真を撮りたいと思う。むしろ美しいと思ってもらえていることに寺は感謝すべきだ」

勧修寺の本堂は、1672（寛文12）年に霊元天皇ゆかりの建物を御所から移したとされる。内部には醍醐天皇の身長と同じ高さとされる約160㌢の本尊・千手観音菩薩像が安置されている。「ここは観音様の道場。参拝者が観音様の力を得て、願いがかなうようであればいい。参拝者が心を和やかに過ごせる寺であれと考えている」

「観音様の道場 願いかなう寺に」

今年は明治維新150年の節目の年だ。幕末の門跡、済範法親王は復飾し、寺を出て、山階宮晃親王となって明治政府の要職を務めた。その後、寺には廃仏毀釈の嵐が襲いかかる。「寺は廃され、山階宮の個人的な邸宅になっていた。しかし、歴史ある寺ということで山階宮は御所の近くに移り、寺は残った」

筑波門跡はその晃親王のひ孫にあたる。1967年に勧修寺の門跡に就任し、以降50年余りが過ぎた。「晃親王との縁は感じる。孫にあたる父（故筑波藤麿・靖国神社宮司）にもこちらへ入るというお話があったようだ。いずれにしても神様、仏様に縁の深い家に生まれた」

自身は学習院の小中高を経て、東寺高（現洛南高）に編入した。その後、空海（弘法大師）ゆかりの種智院大で学んで勧修寺へ。「真言宗の僧侶は種智院大を出ていると信用してもらえる。これも弘法大師のご恩。神仏にご縁を頂いて送っている生涯だ」

◇ ◇

京都、滋賀を拠点とする宗教団体のトップ級の方々にこれまでの半生や教えについてインタビューします。 **＝随時掲載します**

つくば・じょうへん 1935年東京都生まれ。種智院大卒。54年に得度し、63年に勧修寺執行に就任。67年から勧修寺門跡、真言宗山階派管長。著書に「京の古寺から勧修寺」。

京都新聞社 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.

©京都新聞社 無断複製・転載を禁じます